神奈川近代文学館ニュース第一五二号、令和三年四月）

三浦哲郎
処女作とデビュー作

勝又浩

今度の「三浦哲郎展」には、既にご遺族から寄贈されている「三浦哲郎文庫」の他に、最近になって八ヶ岳の山荘から発見された初期の原稿など、初公開の資料がずいぶん加わることになった。

その一つには新発見の井伏鱒二からの来簡もあり、当館が従来から所蔵する三浦哲郎の井伏鱒二宛書簡六十三通と合わせると、師弟三十七年間にわたる交流の跡が浮かび上がって来て圧巻であった。私も見せてもらって深い感銘を受けたが、この書簡については昨年、その一部が新聞にも紹介されたので、お気づきの方も多いであろう。ここではもう一つの新資料、三浦哲郎が早稲田大学仏文科の友人たちと創刊した同人雑誌「非情」に発表した作品について少し記しておきたい。

「非情」は五号まで刊行されたが、三浦哲郎は「誕生記」（創刊号）、「遺書について」（三号）の三作を載せている。これらは、草稿や完成稿などが保存されていて、人物の名前まで変えたりしている字句の異同を見ているだけでも興味が尽きない。しかし私がもっともドキドキする思いで一枚一枚をめくって見たのは、訂正、書き込みがびっしり入った「創生記」本文五十枚の原稿だった。これが、青雲寮の、みそ汁の匂いの浸み込んだ食堂のテーブルで書いたという、三浦哲郎処女作の原稿なのだ。

「創生記」原稿　個人蔵

と書けば、三浦哲郎の処女作が「創生記」？と首を傾げる人もあるかも知れない。実はこの原稿、そのままでは発表されなかった。正しくは「非情」創刊号（昭和二十九年十二月）に発表された「誕生記」の第一稿なのだ。付け加えておくと、「誕生記」は更に六年後、再び書き改められて、タイトルも「幻燈画集」となって「新潮」（昭和三十六年六月）に掲載された。しかし、そのとき三浦哲郎は既に芥川賞受賞（昭和三十六年一月）作家だったから、その後に発表された「幻燈画集」が彼の処女作だったなどとは誰も思わなかったのである。

しかし、「創生記」は「誕生記」であり「幻燈画集」だと知って、なるほど、と思われた人もあるのではないだろうか。というのは、内容は全く違うが太宰治に同題の短編があったことや、旧約聖書「創世記」を絡めるのは大げさすぎると言う同人たちの意見を入れてタイトルは変更されたけれど、話の内容は、ずっと後年、あの奇跡のような名作「白夜を旅する人々」になっていった、作者自身の家族、次々に自殺者や失踪者を出した不幸な家族の物語だからだ。それは紛れもなく、三浦哲郎という作家を生み出した、創生の物語に他ならなかったのだ。

「非情」に載った三作目が「遺書について」であった。昭和二十年八月の前後、うち続いた米機の空襲、一転して敗戦、進駐軍との接触等々の日々を一人称で書いている。主人公は海軍士官学校のための受験勉強中だったが、軍人になる前に既に死の覚悟をしなければならなかった、そんな時代だった。

この一編は井伏鱒二の助言によって「十五歳の周囲」と改題、改稿されて「新潮」の「同人雑誌推薦小説特集」（昭和三十年十二月）に転載されたが、そのまま、その年の「同人雑誌賞」を受賞した。つまり、三浦哲郎のデビュー作となったわけだ。ここでもタイトルのことを言えば、「遺書について」においても、「創生記」と同様、まずは作品の主題を真っ直ぐに表している。それが初期三浦哲郎の文学的な姿勢だった。

（文芸評論家）